# 人権教育に関する特色ある実践事例

| 基準の観点 | 学校全体として人権尊重の視点に立った学校づくりが組織的かつ効果的に進められている実践事例 |
|---|---|

## １．基本情報

**○都道府県名及び市町村名**

愛知県豊明市

**○学校名**

豊明市立栄中学校

**○学校のＵＲＬ**

http://www.sakae-j.aichi-c.ed.jp

## ２．学校紹介

**○学級数**

【通常の学級】１年７学級　２年５学級　３年６学級、【特別支援学級】３学級、【合計】２１学級

**○児童生徒数**

【全生徒数】６４３人（平成２６年９月１日現在）
（内訳：１年 226 人、２年 194 人、３年 223 人）

**○人権教育開発推進事業、人権教育研究推進事業実績（実施年度及び事業の別）**

平成２４・２５年度愛知県教育委員会研究委嘱人権教育研究指定校

**○学校の教育目標、人権教育に関する目標など**

【学校の教育目標】
校訓の「行学一体」の精神を基盤に、心豊かで実行力のある人格の形成をめざして
○　健康で、何事にも耐えぬく　　（耐　力）
○　自ら考え、進んで学ぶ　　（自　学）
○　礼儀正しく、秩序を重んずる　（礼　節）
中学生を育成する。
【人権教育に関する目標】
人権感覚の育成をねらいとし、全教育活動において、自尊感情を高めるための実践を重ねていくことで、人権に関する価値的・態度的・技能的側面を高める。

**○人権教育に係る取組一口メモ**

全教職員が人権尊重の視点に立ち、あらゆる教育活動において生徒の自尊感情を高め、人権感覚を育成する教育活動を充実させる。

**○人権教育にかかる取組の全体概要**

【研究主題】
自尊感情を高め、人権感覚を育成する教育活動の充実
～自他の大切さを認めることができ、思いやりの心をもった生徒の育成を目指して～

【本校の進める人権教育の考え方】

人権教育は、人権や人権擁護に関する知的理解と、人権がもつ価値や重要性を直感的に感受し、それを共感的に受けとめるような感性や感覚、すなわち人権感覚を育成することが必要となる。さらに、こうした知的理解と人権感覚を基盤として、自分と他者との人権擁護を実践しようとする意識、意欲や態度を向上させること、そしてその意欲や態度を実際の行為に結びつける実践力や行動力を育成することが求められる。

自尊感情には、社会的自尊感情（Social Self Esteem：SOSE）と基本的自尊感情（Basic Self Esteem：BASE）という独立した二つの領域があると言われている。社会的自尊感情とは、従来考えられてきたように「他者との比較や優劣で決まってくるもので、勝ったり優れていたりすれば高まる、条件つきで相対的な評価に基づく感情」である。基本的自尊感情とは、「他者との比較や優劣とは無縁に、理由もなく絶対的、根源的な思いとして、自分自身をあるがままに受け入れる、無条件で絶対的な感情」のことである。

本校では、従来注目されてきた社会的自尊感情を育むだけでなく、自尊感情全体の下支えとなる基本的自尊感情を育む取組を意識的に行うことで、２つの領域の自尊感情をバランスよく高め、自尊感情全体を高めることにつながると考えた。

【研究仮説】

基本的自尊感情を育むために、体験と感情の共有を全教育活動で展開することで、生徒の自尊感情が高まり、自分の大切さとともに、他の人の大切さを認めることができ、思いやりをもった行動ができるようになるであろう。

## ３．特色ある実践事例の内容

【研究主題の設定理由】

思春期の中学生は、心身ともに変化が著しく、自分のことが周りにどう映っているか、外見や行動を意識してくるようになる。また、学習面・体力面においても、比較・競争の多い時期であり、ささいなことでも劣等感や敗北感を感じたり、個性を抑えつけて悩んだりする時期でもある。このことから、日々の学校生活の中で、不安やストレスを抱え、短絡的になる生徒も少なくない。一方で、話を聞いてほしい、他人に認められたい、人の役に立ちたい、感謝されたいという欲求をもっており、人の役に立てたという実感を得たときに、大変喜ぶ生徒の姿が見られる。しかし、目の前の生徒の様子を見ていると、今ここに生きていること、存在していることに不安を感じ、自信がもてない状態におかれている子供が増加してきているように感じる。その要因として、家庭教育力・地域教育力の低下に伴い、日常生活の中で自分自身をあるがままに受け入れられる機会が減少してきていることが考えられる。

下表は、平成２５年５月に実施したＱ―Ｕで、自尊感情や意欲向上に関する問いに対して「とてもあてはまる」「あてはまる」と回答した生徒の割合である。

| 問い | １年(%) | ２年(%) | ３年(%) | 全国(%) |
|---|---|---|---|---|
| ①クラスの中で浮いていると感じることがある | 7.4 | 11.4 | 7.2 | 12.9 |
| ②クラスの中で存在感があると思う | 31.3 | 33.3 | **26.7** | **32.4** |
| ③学校内で私を認めてくれる先生がいる | 32.3 | 36.6 | 35.8 | 26.4 |
| ④勉強や運動等で友人から認められていると思う | 55.3 | 46.1 | **42.4** | 38.8 |
| ⑤自分はクラスの活動に貢献していると思う | 50.5 | 48.8 | **33.1** | **39.9** |

以上の結果から、本校の生徒は、ほとんどの項目で全国の傾向より望ましい方向にあると言えるが、②クラスの中で存在感がある、④勉強や運動等で友人から認められている、⑤自分はクラスの活動に貢献している、と思う生徒は、３年がもっとも少なく、②と⑤の項目３年については、全国平均より低くなっている。学年が上がるほど部活動や行事など、活躍の場は増えるはずだが、人数が減少しているということは、中学校生活の中で自分の活躍を自己肯定できなくなっているのではないかと考えられる。

ローゼンバーグの自尊感情尺度をもとに開発された、SOBA-SET（Social Basic-Self Esteem Test 社会的・基本的自尊感情尺度）という心理テストを用いて、生徒個々の変容だけでなく、客観的な数値としても検証した。平成２４年６月の測定を基準値とし、半年後の平成２４年１２月に測定したところ、社会的自尊感情には大きな変化がなかったが、基本的自尊感情で、低値の生徒が5.9%増加していた。これは、先にあげたＱ―Ｕの結果からみた「学年が上がると人数が減少している」ことと合致する。つまり、学年が上がるにつれて低下する自尊感情とは、基本的自尊感情のことであると考えられる。そこで、平成２５年度は、基本的自尊感情を育む実践に重点的に取り組むこととした。

【研究の手立て】

（１）体験の共有場面の設定

自分の意見や作品などが授業に生かされたり、自分の存在が受け入れられたりするなどの体験を共有する場面を設定する。

（２）感情の共有場面の設定

自身が考えたことや感じたこと、仲間の言動でよかったことやうれしかったことなど、感情を共有する場面を設定する。

【具体的な実践事例】

（１）教科における実践

①　国語科

グループ活動の中で、同じグループの生徒の意見をメモしながら話し合わせた。意見を交換し合うなど、共に学び合う雰囲気をつくり上げることができた。授業の最後に、その時間の活動を振り返らせた。グループの中で自信をもって意見を交換し合う姿が、少しずつ見られるようになってきた。

話し合い、学び合う様子

②　社会科

少人数グループによる話合い活動を行ったり、教科書や資料、地図帳を使って課題について調べたことを発表したりするなど、一人一人が意見や考えを発言したり、聞いたりする場を意図的に設定することで、生徒同士で学び合わせた。話合い活動の中で仲間の意見で参考になったものを書き加えさせたり、メモを取らせたりした。また、授業の最後に、話合い活動を振り返らせ、仲間の言動でよかったことやうれしかったことを共有させた。

仲間の意見をメモしたり、書きたしたりすることで多様な考えや意見に触れるこ

とができ、協力して課題を解決できる生徒が増えた。また、話合い活動を振り返ることで、自分の意見を聞いてもらったことを確認したり、仲間の意見をしっかり聞いたことを確認したりすることで、充実感をもたせることができた。

③　数学科

授業の中で、生徒自身が問題作成をする内容を取り入れた。グループ活動において、発表し合い、その問題を解き合わせた。作成した問題の内容を確認し、授業の感想を書かせ、生徒の反応を検証した。多くの生徒たちは、いろいろなパターンの問題を作ることができるということに驚き、自分が作った問題を解説する難しさに気付くことができた。また、仲間同士で伝え合うことの大切さを実感することができた。

④　理科

実験・観察の際、一人一人に自分の役割を自覚させて実践した。実験観察評価カードを用いて、グループでの活動を振り返り、グループやクラスの仲間の発言・行動で役に立ったこと・よかったこと・うれしかったことを具体的に記入させた。仲間のよいところを見つけることができ、また仲間から言われてうれしかったことを記入することができた。仲間の言動から自分を高めようとする言葉を記入する生徒もいた。

役割をもって実験に取り組む様子

⑤　英語科

グループやペア学習など協力して活動できる場を工夫し、自己表現活動や暗唱活動を通して、他者の発言や作品のよさに気付き、学ぼうとする態度を育てた。相互評価をさせることにより、他のペアのよさに気付き、次回はよりよい発表にしたいという意欲付けとなった。発音練習を積極的に行う生徒が増え、生徒が相互に教え合える姿が多く見られるようになった。

⑥　音楽科

合唱のパート練習の中で、意見を交換し合う場面を設けた。意見を伝え合い、それをもとに練習を進めていくことで、自分の意見が受け入れられたという実感ができ、意欲的に取り組む生徒が多くなった。

⑦　美術科

「銅板レリーフ」において、針打ちのよい例として生徒作品を紹介した。釘の持ち方や金槌の力具合、打つテンポを説明させて他の生徒の参考にさせた。上手に打ち出した生徒の作品に触れさせることにより、手触りや凹凸の関係を理解させた。仲間のよい作品を参考に見たり、その説明を聞き、打ち方を工夫したりする生徒が増えた。また、実際の作品を触れさせることにより、その感触をじかに感じ取り、その表現に近づけようと努力する生徒が増えた。

「手を作る」（粘土）において、手のひらの肉付きが上手に表現できている生徒作品を選び、表現のよい点を発表し合い、自己の作品に生かせるようにさせた。生徒作品のよい点を発表し合うことにより、自己の作品を見直し、修正する生徒が増えた。

⑧　保健体育科

「バドミントン」では、いろいろな仲間とペアを組むことによって、コミュニケーション能力を高め、協力し合って進めることの楽しさを味わわせたいと考えた。多くの生徒が、いろいろなペアとの関わりを通して、声をかけ合って楽しく試合に臨んでいた。さらに、学校生活でも生かしていきたいと話す生徒も多かった。

「集団行動」では、集団における自分の関わり方について考え、行動に移すことができるように授業を進めた。大学生による集団行動の映像を見せたことで、気持ちを一つにして取り組みたいという強い思いが、練習に現れていた。発表時もグループを越えて声をかけ合い、雰囲気も盛り上げることができた。

⑨　技術・家庭科

技術分野の板材で作品を制作する授業で、４人がけのテーブルを一つのグループとして、作業方法でわからないことがあったら、グループの仲間や近くの人に聞くように促した。作業方法でわからないことがあっても、仲間の様子を見たり、聞いたりしながら作業を進める姿が見られ、作業に対して消極的な生徒の数が以前よりも減った。

家庭分野のエコバッグ作りでは、班隊形で作業を行うことで、教え合いながら製作した。日頃は勉強や運動で活躍できない生徒も、生き生きと活動することができた。手先の器用な生徒や裁縫が得意な生徒が積極的に仲間に教える姿や、グループ内の仲間同士でよい点を褒め合う姿などが見られ、意欲的に取り組ませることができた。

（２）教科外活動での実践

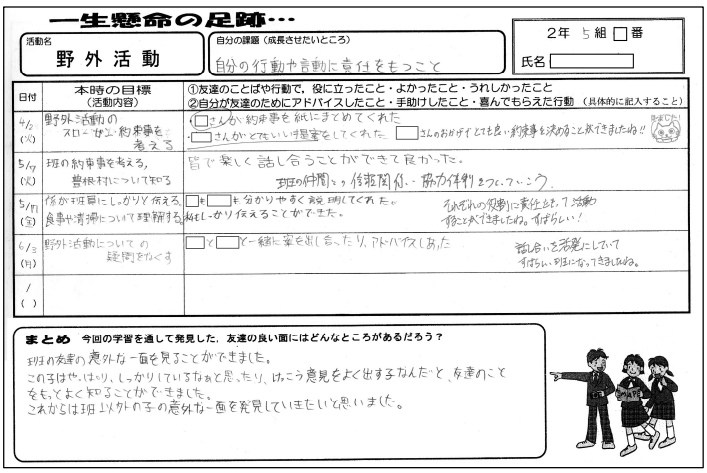
①　総合的な学習の時間

ア　１年社会見学に向けての班別学習計画

各グループの中で、行程表作りや見学地の下調べをする係を分担し、各自で責任をもって取り組ませた。調べた内容を伝え合うことで、グループにはなくてはならない存在として互いを認め合う活動となった。また、班活動で互いの意見や考えを伝え合わせる場面を設けた。ワークシートに学習の振り返りやグループの仲間の発言でよかったことを記入させ、互いのよさを認め合う活動を行ったところ、自分や仲間のよい言動を発見しようとする生徒が増えてきた。

イ　２年野外活動に向けての事前学習

全生徒に一人一役の係を与え、係別に事前学習を行った。係の生徒が、自分の班の生徒にそれぞれの係で学んだことを教える時間（レクチャー）を設定し、班活動で発見した仲間のよい言動をワークシートに記入させて振り返り、よいところを認め合う活動を行った。それぞれの係が責任をもって班の仲間に伝えたり、活動したりする姿が見られた。また、他の生徒か


一生懸命の足跡…

活動名：野外活動

自分の課題（成長させたいところ）：自分の行動や言動に責任をもつこと

2年 5組 □番　氏名

| 日付 | 本時の目標（活動内容） | ①友達のことばや行動で，役に立ったこと・よかったこと・うれしかったこと<br>②自分が友達のためにアドバイスしたこと・手助けしたこと・喜んでもらえた行動（具体的に記入すること） |
|---|---|---|
| 4/6（火） | 野外活動のスローガン・約束事を考える | ・□さんが約束事を紙にまとめてくれた<br>・□さんがとてもいい提案をしてくれた。□さんのおかげでとても良い約束事を決めることができたね!! |
| 5/9（火） | 班の約束事を考える，豊根村について知る | 皆で楽しく話し合うことができて良かった。<br>班の仲間から，信頼関係・協力体制をつくれた。 |
| 5/11（金） | 係が班員にしっかりと伝える，食事や清掃について理解する | □と□も分かりやすく説明してくれた。<br>みんなしっかり伝えることができた。<br>それぞれの役割に責任をもって活動務めることができたね。すばらしい! |
| 6/3（月） | 野外活動についての疑問をなくす | □と□と一緒に案を出し合ったり，アドバイスしあった。<br>話し合いを充実にしていすばらしい班になってきたね。 |
| /（） | | |

まとめ　今回の学習を通して発見した，友達の良い面にはどんなところがあるだろう？

班の友達の意外な一面を見ることができました。
この子はやはり，しっかりしているなぁと思ったり，けっこう意見をよく出す子なんだ〜と，友達のことをもっとよく知ることができました。
これからは班以外の子の意外な一面を発見していきたいと思いました。

総合的な学習の時間　振り返りワークシート

ら学ぼうとする意識をもたせることができた。実行委員会を組織し、執行部・セレモニー部・ファイヤー部・しおりイラスト部・トーチ部の５つの部会で野外活動を運営し、生徒自身の手でつくりあげる野外活動となった。実行委員の活躍を各学級や学年集会で紹介するとともに、各学級の振り返りのワークシートで見られた実行委員への感謝の気持ちを共有することができた。

ウ　３年修学旅行の班別研修に向けて

男女合同の班編制にし、班ごとに、都内班別学習の見学地、見学地までの経路などの調べ学習を行い、班長を中心に役割分担をさせて話し合わせた。各自で見学したい場所は様々であるが、自分の希望を一方的に主張するのではなく、他の人の意見も聞きながら見学地を調整していく力を育むことができた。振り返りで、「仲間の言動で役に立ったことやよかったこと」「自分が仲間のために手助けしたこと」を記入させ、互いのよいところを認め合う活動を行うことで、自分や仲間のよい言動を発見し、共有させることができた。

エ　体育大会に向けた演技応援づくり

３年生が中心となって意見を出し合い、創作した演技応援の振り付けを、分担して１・２年生に教えさせた。自己の演技と、仲間の演技の違いを映像で見て比較することで、共に学び合い、認め合える雰囲気を育てられた。また、全員で一つの演技をつくり上げたという達成感をもたせることができた。

３年生が１・２年生に振付けを教える様子

（３）学級学年経営での実践

靴の整頓、帰りの教室環境整備、給食準備の時間の状況を毎日記録し、よくできたクラスを毎朝のＳＴで発表した。優秀クラスは毎学期末に表彰することで、仲間とともに目標を達成することに喜びを感じ、より向上できるように協力して取り組めるようになった。互いの活動を認め合ったり、自分たちの活動を反省したりする機会を設けることで、学級全体で目標に向かう雰囲気ができた。また、「当たり前のことがあたりまえにできる」ことが落ち着いた雰囲気で生活できる基盤となった。

## ４．実施する際に生じた課題及びその解決策

平成２４年度には、手立て（１）体験の共有場面の設定、手立て（２）感情の共有場面の設定に加え、社会的自尊感情を育むための手立てとして、「挑戦・成功体験と称賛」を行った。生徒の役割や出番を与えて挑戦させることで、成功体験を積ませたり、リーダーとしての活躍を通して、少しでもよい結果が出たときに、認めて評価するということに力を入れた。しかし、前述のように基本的自尊感情の低下があったため、平成２５年度は基本的自尊感情を高めることにねらいを絞り、実践してきた。

定期的にSOBA-SETによる客観的な測定を行い、また、学年会議の中で密に生徒の変容について議論していくことで、実践が効果的に表れているか、実践と検証を繰り替えしながら進めた。

## ５．実践事例の実績、実施による効果

【取組の実績】

全教育活動で体験の共有と感情の共有を行ったことで、他者と関わることや、思いを語り合うことに喜びを感じ、他人のために行動できる生徒が多くなってきたと思われる。生徒アンケートの結果「清掃活動や給食の準備に積極的に取り組む」という生徒が、66.6％から75.0％に向上したことや、「時間に余裕をもった行動・落ち着いた行動がとれるようになった」とする生徒は38.8％から69.4％に向上している。自尊感情を育む活動としては十分な結果は得られなかったが、落ち着いて行動できる生徒が増え、人のために行動できる、まさに人権感覚をもって行動できる生徒が増えてきたものといえる。

４月には基本的自尊感情が低値だった生徒は12.7％であったが、10月の測定では、低値の生徒が6.8％に減少した。授業や学校行事での実践を通して、自己存在感や自己有用感を高めた生徒が多かったと考えられる。

また、生徒アンケートによると、「自分は学校又は学級の仲間のために活躍している」と思う生徒が、93.5％だったものが、91.9％に低下した。これは、他人のために行動できる生徒が増えてきたにもかかわらず、自身の実感が伴っていないことを示すものである。我々教師が生徒の成長を認め、生徒自身に実感できるような適切な指導が行えるように、今後も研究を進めていきたい。

## ６．実践事例についての評価

○　基本的自尊感情においては、従来の自尊感情を高めるという意識では高めることができないため、意識的に行うことが重要であることが明らかになった。

○　実践を通して、落ち着いて行動できる生徒が増え、人のために行動できる生徒が増えた。

○　自他のよさを認めることができ、基本的自尊感情の低い生徒が減少した。

## ７．参考文献

○人権教育についての基礎資料　文部科学省ホームページ
〈http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/jinken/siryo/index.htm〉

○「子どもの自尊感情をどう育てるか そばセット(SOBA-SET)で自尊感情を測る」近藤卓　ほんの森出版(2013)

○「自尊感情と共有体験の心理学―理論・測定・実践」近藤卓　金子書房(2010)

○「子どもの死の認識の発達に関する研究(第４報)-自尊感情に関する実態調査-」望月美紗子・近藤卓ら(2012)

【人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント】

| 豊明市立栄中学校 |
| --- |
| 人権尊重の視点に立つ学校づくりが組織的かつ効果的に進められている事例である。生徒の意見や作品などが授業に生かされ，各自の存在が受け入れられる体験を共有する場面の設定、各自の考えや感じたことなどを共有し合う場面の設定、等に力を入れている。各教科の授業づくりにおいても、それぞれの教科の特性に留意しつつ、ペア学習や小グループ学習を積極的に取り入れるとともに、総合的学習の時間を活用した社会見学の班別学習計画、修学旅行に向けた男女合同の班編成での見学地や経路などの調べ学習等の積極的活用を図っている。 |